

「死」を考える講義の効果

○小正 浩徳 (龍谷大学文学部)

キーワード: 「死」を考える講義, PAC 分析, 対人援助職養成

目的

高齢化社会に対する心理学的支援は今後ますます必要となる。このことを踏まえて、筆者は臨床心理学を専攻する学生に向け、「死」を考える講義を行ってきた。

この講義では、1年をかけて、キューブラー・ロスならびにニューメイヤーの著作の講読、「死」に関するグループワーク並びに映像視聴、エンディングノートについて外部講師による講義、入棺体験実習を実施している。

今回、この講義が与えた影響について、PAC 分析(内藤, 2002)を用いたインタビュー調査を通して検討を行う。

なお本調査実施にあたり、対象となる講義受講生には、研究の目的について説明を行い、研究参加に同意を得ている。加えて、本調査における利益相反は無い。

方法

対象者: A 大学女子学生 1 名

実施時期: X 年 2 月

手続き: PAC 分析は以下の手続きで実施した。まず連想刺激として、「講読での授業内容や実習での体験を振り返り、あなたが今思うことイメージすることを、1つのイメージにつき1枚のカードに書いてください。あわせて思い浮かんだ順に番号もカードに記入してください」と教示し、縦 25mm、横 75mmのカードに自由に記入させた。続いて、カードを記入順に並べ、カードに記載された内容について対象者自身が重要と思う順にカードを並べ替えさせた。その後、調査者が全てのカードを対にし、ランダムに配置した質問紙を作成した。その対が直感的イメージの上での程度似ているかを対象者に判断させ、その近さを「非常に近い; 1点」から「非常に遠い; 7点」までの7件法により採点させた。採点された結果を、ウォード法によるクラスター分析(SPSS statics ver. 22)をした。この際、同じ項目の組み合わせは0とし、その他は7件法での数字を用いた。クラスター分析によって作成されたデンドログラムから、対象者と共に群を抽出し、それぞれの群についての内容を対象者に吟味、報告させた。

結果と考察

全部で10イメージが想起された。クラスター分析から得られたデンドログラムから、3群を抽出した(fig. 1)。1群目を「葬儀」と意味づけし、内容の概観から「よくある葬式のイメージではなく、誰もが悲しいけど笑顔になれそうな、そういう仕事に就きたい私の思いが集まっている」とし、これらは実習か

ら得たものだ」と述べた。2群目は「生死について」とし、内容の概観から「死があるからこそ、死ぬとなった時に後悔しないよう今できることを経験してみよう。精一杯生きようという思い」があり、これらは講義を通して自分が考えるようになったことであると述べた。3群目は「授業感想」とし、「いろんな考え方に触れられた」ことで、広い視野で考えられるようになったと述べた。

1群と2群の同異点について、1群を「プラン」、2群を「プランされる側」と述べた。さらに、「死」を怖がる気持ちがあるから「ケア」につながることで、根拠はないのに罪悪感があることを述べた。1群と3群の同異点について、授業と実習では全然違うものと考えていたと述べる。しかし、このPAC分析を通して、そこに違いはないことに気付いたと話した。実習に行った者同士での話合いを行ったことが大きく影響を与えていると述べた。2群と3群の同異点について、同じところは「死」にまつわる考えを知ったことと述べ、違うところは「死」についての自分なりの結論とこだわりのようなものがあることと人によってその考え方はそれぞれであると述べた。

さらに対象者は、2群が土台となって1群につながり、そして3群があるとしたうえで、「自分なりに生死について考えたからこそ、それにまつわる仕事に就きたいと思えた。もしも、考えずにこうした仕事に就いていたら、自分の中で罪悪感を強く感じると思う。相手に対して、関わり方が薄いものになってしまう」と述べた。

対象者は、本講義を受講する中で葬儀社に勤めるという将来の進路選択を行った。その進路選択に至った過程をPAC分析により明らかにすることができた。これらを通じて、「死」を考える講義は、対人援助職養成においてその役割を担うことのできる可能性を示唆していると考えられる。

(KOMASA Hironori)

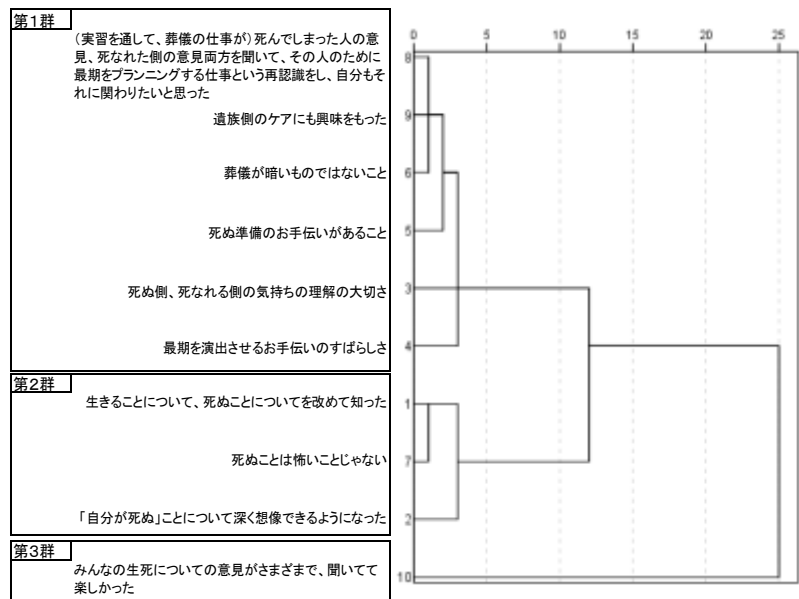


fig.1 対象者によるイメージされた語群のクラスター分析結果